

古川 安 : 喜多源逸と日本の化学 化学者たちの京都学派

喜多源逸 (1883-1952) は京都帝国大学在任中、工業化学における「京都学派」と呼ばれる学派を創始、独自の学風を植え付け、門下からは、桜田一郎、堀尾正雄、李升基、小田良平、児玉信次郎、宍戸圭一、古川淳二、新宮春男、岡村誠三、福井謙一、鶴田禎二、野崎一、野依良治、をはじめとする多くの逸材を輩出した。

喜多源逸の生涯や業績については、その歴史的重要性にもかかわらず、科学史的視点からの単独かつ系統的に扱った研究はなかった。このたび初めて、科学史研究の重鎮、古川安先生によるご研究の力作「喜多源逸とその弟子たち」が完成、正式出版名「喜多源逸と日本の化学-化学者たちの京都学派-」として、京都大学学術出版会より刊行されることになった(2017 末)。

古川安先生(1948~)は、東京工大工学部(合成化学)卒業、渡米、オクラホマ大にて、科学史研究-PhD 取得。英文による大作「Staudinger - Carothers (1998)」の発表により一躍、近代化学工業に関する歴史研究の第一人者として認められるようになった。帰日後、日本大学生物資源科学部教授(2004~)。化学史学会会長に就任、また東京で開催された国際化学史学会を主催等ご活躍。

「喜多源逸とその弟子たち」は、古川先生がこの 10 年間、取り組まれてきたライフワークである。化学史学会編の「化学史研究」誌上に、第 1 報「喜多源一論」(2010)、第 2 報「桜田一郎論」(2012)、第 3 報「福井謙一論」(2014)を、次々に発表された。この 3 部作が、今回発刊の大著の主幹を成す。

第 2 報での若き日の桜田一郎は、ドイツに留学、X 線による繊維の構造研究技術を習得するよう喜多より指示を受け、帰国後重要な役割を果たす。今や日本が世界有数の高分子化学研究、高分子化学工業国として世界で認められるようになったが、発足からその発展に至るまで終始、指導的な役割を果たした桜田の功績は大きい。第 3 報は、日本人で最初のノーベル化学賞受賞者、福井謙一についてである。福井謙一を直接指導した教授は、喜多イズムの忠実な継承者の児玉新次郎であった。喜多は物理学者の荒木源太郎を工学部に招き、積極的に環境整備した。奇しくも明年 2018 年は、福井生誕 100 年にあたる。

今回の新刊書では、上記の 3 部作に加えて、未発表の 2 部、(その 1) 戦時下の人造石油開発、ならびに(その 2) 有機合成化学研究の系譜、が含まれている。(その 1) では、戦時中、児玉の指揮下で実施された膨大な軍事研究であったが、実用化には至らなかった。しかし戦後の石油化学業界に多数の有意な人材を送り出し、基礎化学においても顕著な展開があった。(その 2) の出発も、喜多の先見性に始まる。プラハ独・工科大学講師の有機化学者 K. Lauer を選任講師として招聘(1934)、小田良平はその薫陶を受け、有機合成化学伝統の開祖となる。更にその系譜は、次のノーベル化学賞受賞の野依良治へとつながる。